

An Evaluation of the Pure Land as Described in Onatsu Sosei Monogatari

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-03-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大野, 真実 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1726

An Evaluation of the Pure Land as Described in *Onatsu Sosei Monogatari*

ONO Mami

Summary

Onatsu Sosei Monogatari (*Resurrection of Onatsu*) is a *kange bon* (indoctrination book) of Jōdo-Shinshū, written in the middle of the Edo period. Onatsu became a faithful follower after being taught by a monk. Afterward, she died and paid a brief visit to the Pure Land. The day following her death she came back to life and spoke about what she had seen in the Pure Land. Today there are two editions of this story: one in the style of printed matter, another in manuscript form. There are some differences in content between two editions. This study was carried out to clarify the sources and references of the story. Contrary to a previous study, today there is some evidence that the *Kanagaki Eiri Ōjō Yōshū and Kōkan Meishōroku*, another indoctrination book of Jōdo-shū, influenced the description of the Pure Land in the Onatsu story. The original story may have been written by a monk who preached to ordinary people.

The manuscript seems to be antecedent to the printed edition. In the manuscript, the Pure Land is described as a utopia without suffering and anxiety, or in other words, a place very different from the real world and unimaginable for the people of that period. So, it is quite reasonable to conclude that this story about Onatsu was created for the sake of indoctrination, and to persuade people to believe in the Pure Land. This study thus offers some insight into the religious aspects and views of afterlife at the time.

「おなつ蘇甦物語」研究序説
——極楽描写の原典を巡る考察——

大野 真実

「おなつ蘇甦物語」研究序説

——極楽描写の原典を巡る考察——

大野 真実

〈キーワード〉 「おなつ蘇甦物語」／勸化本／浄土真宗／極楽浄土／蘇生譚／「仮名書き絵入り往生要集」／『孝感冥祥録』

はじめに

「おなつ蘇甦物語」は、江戸時代中期に実在したとされる「おなつ」という女性の改心と蘇りを巡る物語であり、真宗の勸化本¹⁾に分類される。このような通俗仏書は、これまでに思想的研究の対象として注目されたことは少なかったが、当時の市井の人々が抱いていた宗教観や来世観を反映する資料として、価値あるものであると筆者は考えている。

この物語の流布を巡ってその特異な点は、版本が読み継がれると同時に、版本の書写ではない別の系統の写本類が、版本とほぼ同時期から約百年の長きにわたり書写され続けていることである。またそれらの原典となる祖本や作者については全く不明である。さらに、この物語の特徴の一つとしてその精緻な極楽の描写があげられるが、その描写のために参照された文献を明らかにしようとする調査研究は現時点で存在しない。先行研究ではその参照文献は「浄土三部経」²⁾と推定されているが、それらにはみられない表現が実際に多数見つけられる。今回はこの極楽描写部分に注目し、その参照文献を確認することで、この物語を作成した人物像を推察し、版本・写本類の成立事情、さらに当時の人々の来世観についても探求してみたい。

1. 「おなつ蘇甦物語」の概略

1.1. 「おなつ蘇甦物語」の位置づけ

江戸時代に在俗の人々への仏教の教化を目的とした書物群は「談義本」などと呼ばれてきたが、後小路はそれらを「勸化本」と総称している³⁾。江戸初期から中期にかけての出版の隆盛に伴い、勸化本も広く市井に浸透していった。勸化本には怪異譚や冥界遍歴譚などの庶民の興味を引きやすい奇談が多く題材とされたが、江戸時代中期までは真宗の勸化本に蘇生譚や極楽見聞譚は少なく、管見の限りでは、この物語以前には『親聞往生験記』（月筌撰 享保四年・1719）の「釈尼妙涼」の夢中極楽見聞譚が見つけられる。後世になって真宗でも、往生伝や妙好人伝に蘇生譚などがいくつも見られるようになるが、「おなつ蘇甦物語」はその先駆けとなったと言えよう。

1.2. 版本と写本の関係性

版本『おなつ蘇甦物語』は、安永二年（1773）に同一の版木を用いて京大坂の複数の書林から出版されている。後に明治十九年（1886）と二十四年（1891）に再刻され⁴⁾ さらに昭和八年（1933）に活字本として出版されているが、すべて文章は同一である。現在でも安永二年本を含め多数の現存があり、相当の部数が出回っていたものと考えられる。著者名としては奥書に「釈義貫聞書」となっているが、この「釈義貫」については情報が得られない。版本を書写した写本も存在するが、後述する別系統の写本類に比べてその数は少ない。

写本類については、現在確認できる最古のものは二点あり、いずれも安永四年（1775）と記される⁵⁾。これは版本出版二年後だが、版本とは細部が異なり、またこの二つの写本各々も内容、文章、題名ともに相違点があるため、どちらかがどちらかを書写したわけではなく、これら二つの写本の元となる親本などの存在があって、その書写の流れの中で別々に作成さ

れたものではないかと推察される。以降、明治期に至るまで多数の写本が作成されており⁶⁾、吉海は「写本だけでも軽く百本以上は存するはず」と述べている⁷⁾。現時点で筆者は八本の写本の内容を確認しているが⁸⁾、いずれもあらずじは同一ながら、まったく同じ文章のものではなく、何らかの文言の差異や付加、省略、書き落としと見られる部分などがある。これらの写本の書写・所有者名があるもののほとんどは一般人と思しき氏名である。

1.3. 先行研究

先行研究としては、まず1980年に地元兵庫県の郷土史家であった足立の自費出版書『妙好人おなつ』⁹⁾があり、版本と比較した写本類について、「明らかに違った宗派の系統のものと見られる」との考察がなされている。真宗学の立場からは、2001年に平田が勸化部分に注目した版本と写本類の差異について詳細に考察し¹⁰⁾、「浄土宗のフィールドからか、もしくは「浄土宗」的な影響を受けた「自力」性の強い真宗に属した者の営み」によって写本の祖本が生まれ、それを教団中央から再構成したものが版本であるとされている。さらに版本は僧侶の立場から、写本は被教化の立場としての民衆・門徒の視点からとしている。極楽部分についてもその差異が現れているとし、版本の極楽描写について「『浄土三部経』の経文を忠実に再現したもの」とし、また同氏は『大系真宗史料』のこの物語の解説でも、版本・写本類双方についてその極楽描写を「『仏説阿弥陀経』に説かれる極楽世界をもととしたもの」¹¹⁾とされている。しかしこの点についての検証はなされていない。

さらに同年、異なる分野から二編の研究論文が出されているが、いずれも版本の翻刻と書誌学的考察であり、その思想的な解析を行ったのは前述の平田のみである^{12) 13)}。

1.4. あらずじ

但馬国豊岡福田村の百姓吉助の女房おなつは念仏嫌いであった。吉助は

旦那寺の浄土真宗真光寺住持に勸化を依頼する。住持の勸化部分の内容が版本と写本では大きく異なるが、いずれもおなつは大信心者となる。以降、おなつは念仏をして過ごすようになるが、妊娠し臨月に至り、難産のため母子ともに亡くなってしまう。家族が葬儀を依頼に行った真光寺で、同日に住持も亡くなっていたことが知らされる。翌日おなつは蘇生し、自分が一瞬で極楽に往生したこと、極楽では美しい姿で五神通を備えていたこと、極楽の大地、宮殿、宝樹、池のすばらしさや黄金の山のような阿弥陀仏のありがたさ、菩薩聖衆の喜びに満ちた姿などを目の当たりにしたことを語る。しかし、実際に往生できる人は稀有であるから、人々に浄土を願うよう勧める。さらに体験が事実である証拠として、自らの真の往生が四年後の宝暦十三年三月十五日であること、母が来年九月二十日に命終するが、念仏はしていても本願や浄土の存在を疑っているため、往生は叶わないことなどを、浄土で親鸞聖人に会い、過去生の因縁と共に教えられたと語る。また極楽でおなつは菩薩の姿の真光寺住持にも出会い、おなつと同日に往生したと告げられる。おなつの母は疑いを晴らし、翌年九月二十日に往生する。多くの写本ではここで物語が終結しているが、一部の写本と版本ではこの後おなつの読者に対する勸化が続き、勸化本の定石である、最後に物語が事実であることを念押しする文などで終わる。版本を含めほとんどの写本で、おなつの真の往生の様子については描かれていない。

2. 極楽描写の解析

2.1. 研究目的と対象文献・方法

この物語の極楽描写について、前述の如く先行研究で平田は「浄土三部経」または『仏説阿弥陀経』からそれらを取り入れたと想定している。確かに「浄土三部経」にみられる表現は多いが、「菩薩となった世々生々の知己に迎えられる」、「黄金の山のような阿弥陀如来」、「七宝の欄干や瓔珞華鬘を飾る宮殿」、「宮殿や雲に乗って飛行する天人」などは「浄土三部経」では認められない。「浄土三部経」を出典としているなら、この物語

の作者は漢文文献を読解し、經典や教義に精通する僧侶などが想起され、当時の真宗教学との合致も想定できるであろう。また、版本と写本類の描写に特徴的な差異や出典の相違があれば、各々の作者やその成立事情を知りえる可能性がある。

当時經典以外に、どのような媒体によって人々は極楽を知り得ただろうかと考える時、書籍というメディアではまず江戸初期から仮名書き本として広く市井の人々にも読まれていた「仮名書き絵入り往生要集」¹⁴⁾が想起される。原著の『往生要集』は漢文表記だが、江戸初期以降大文第一と第二のみの内容が、仮名書き絵入本として一般向けに出版されていた。本論ではまず、「浄土三部経」に加え、『往生要集』と、「仮名書き絵入り往生要集」の一つであり「おなつ蘇甦物語」版本以前の出版である『ゑ入り往生要集』を用いて比較対象を行うこととした。さらに、「おなつ蘇甦物語」以前に刊行された著名な冥界見聞譚として、浄土宗の勸化本である伝阿『孝感冥祥録』（享保十八年・1733）にも極楽描写が豊富であることから、これも含めることとした。対象としたのは以下の文献である。「浄土三部経」、『往生要集』に関しては書き下し文である下記を用いた。

- ① 版本『おなつ蘇甦物語』（安永二年 積義貫）
- ② 写本1『但馬国於夏蘇生記』（安永四年 保貞写・個人蔵）
- ③ 写本2『但馬国於夏物語』（安永四年 書写者不明・架蔵）以上前述
- ④ 『仏説無量寿経』（『註釈版聖典第二版』）（以下『無量寿経』）
- ⑤ 『仏説観無量寿経』（同上）（以下『観経』）
- ⑥ 『仏説阿弥陀経』（同上）（以下『阿弥陀経』）
- ⑦ 『往生要集』（『註釈版聖典七祖篇』）
- ⑧ 『ゑ入り往生要集』（西田直樹『「仮名書き絵入り往生要集」の成立と展開 研究篇・資料篇』）（以下『ゑ入り』）
- ⑨ 『孝感冥祥録』（横山邦治氏蔵・新日本古典籍総合データベース公開画像）

2.2. 写本と版本の比較

ここではまず版本①と写本②③について、各々の極楽描写から五十九ヶ所の表現を抽出し、共通性を確認した。

表1 版・写本の極楽描写の共通表現

描 写	数 (ヶ所)
三編すべてに共通	32
版本のみ	5
版本と写本『但馬国於夏蘇生記』のみ共通	1
版本と写本『但馬国於夏物語』のみ共通	0
写本二編にのみ共通	19
写本『但馬国於夏蘇生記』のみ	2
写本『但馬国於夏物語』のみ	0
計	59

表1の如く、三編に共通する表現が半数以上あり、いずれの表現も類似していた。写本二編に共通するが版本には無い十九ヶ所の表現の内、十一ヶ所は極楽を現世と比較して優位であることを列挙する部分であり、二ヶ所はおなつ自身が極楽で美しい衣装を着て二十歳程に若返っていたという部分であって、これも現世との対比としてよい表現である。版本のみにある描写五ヶ所に関しては特徴が認められなかった。写本『蘇生記』のみとした二ヶ所は、いずれも以前に一度使用した文言が別の個所に再度現れる重複表現であり、写本間の有意な差異はほぼないと言ってよいと思われる。

2.3. 版本・写本に共通する描写と「浄土三部経」、「往生要集」の比較

次に、版本①と写本②③の描写について、「浄土三部経」および、「往生要集」、「孝感冥祥録」を比較した。写本二編の間で共通しない表現につい

ては、いずれかに出現するもの全てを対象とした。「往生要集」と『孝感冥祥録』には「浄土三部経」からの引用も多いため、ある程度の重複は当然ではあるが、以下に整理し表として提示する。まず版本と写本に共通する表現を表2にまとめた。

表2 版本・写本に共通する描写と「浄土三部経」・「往生要集」・「孝感冥祥録」との対照

「おなつ蘇酈物語」 版本・写本	浄土三部経			往生要集		孝感冥祥録
	無量寿経	観経	阿弥陀経	往生要集	系入り	
自身の身は紫磨黄金 またはこがねの体	○ 真金色	○ 紫磨金色		○ 紫磨金色	◎ 紫磨黄金	△ 水精のごとく
通力自在である	○ 神通自在	○ 三明六通		○ 五神通	○ 五通	○ 三明六通
心には一切の事を知り、 目には十方世界を見渡し	○ (願文第八・六)			○ 六道衆生の心は明らかなる鏡に・十方界の色を見んと欲へば	○ 六道の衆生のこゝろはあきらかなるかゞみに・十方世界を見んとおもへば	
先に往生した人々が菩薩の姿で迎え出るのを見ると、みな過去生での知己である			△ 「俱会一処」?	△ 「聖衆俱会衆」?	△ 「聖衆俱会衆」?	△ 閻浮同行の…出迎へ ◎ (評注) 無始以来の…往生せる者に会ふ
大地の平らかさは澄みわたる水のごとく(水のごとくすみ渡り見え透き)	△ 恢廓曠蕩にして限極すべからず	△ 氷の映徹せるを見て琉璃の?		△ 坦然平正・恢廓曠蕩	△ たひらかにして…大にひろくして	△ 廣大無辺…平かなる事大海の如く
光り輝く黄金の山のように見える阿弥陀仏と観音・勢至		○ 閻浮壇金色		◎ 金山王	◎ 金山王	◎ 金の山
立ち並ぶ宮殿楼閣に七宝の欄干				○ 欄楯	◎ らんかん	○ 鉤欄
宮殿に瓔珞(花鬘)				◎ 瓔珞	◎ 瓔珞	◎ 瓔珞・華鬘・宝鐸

花が咲き乱れ匂いが芬々とする		○ 妙華		○ 天華妙色	○ 天の花	
風が吹くと微妙百千種の楽が聞こえる	○ 無量の妙法の音声		◎ 百千種の楽	◎ 百千種の楽	◎ 百千種の音楽	◎ 百千の音楽
八功德の池には五色の蓮花が咲く	○	△ 八つの池水	○	○	○	△ (八功德水の表記なし)
四方の道とみな七宝または黄金			○ 階道	○ 階道	◎ かいろうきざはし	△ 汀
聖衆達は蓮花に乗って池中を巡る						△ 葉に…乗り
水は意に添い思いのままである	◎ 意に随ふ			◎ 念に随ひ	◎ おもひにしたがひ	△ 玉のごとくに舞上り
風が吹くと波立ち自然の音楽が現れる	△ 自然の妙声	△ その声微妙		△ その声微妙	△ そのこゑ微妙	
阿弥陀仏や観音・勢至を圍繞し説法を聴聞し喜ぶ菩薩たち	○			○	○	
菩薩たちが楽器を演奏し、舞遊ぶ	◎ 菩薩… 天の楽を			○ 諸天… 音楽を	○ 天人は… おんがくを	◎ 菩薩… 音楽を
百味の御食が備わる	◎ 百味の御食			○ 妙なる味はひ	◎ 百味の御食	○ 諸の御食
美しい天人たちが宮殿に乗って虚空をめぐる	△ 人民…宮殿に乗じて			△ あるひは宮殿に乗り	△ あるひは宮殿にのり	△ 無数の菩薩宮殿に乗じて
天人が赤や白の雲に乗って遊ぶ						△ (菩薩)五色の雲にのりて
他生浄土の菩薩たちが蓮花に乗って飛来する	△ かの土の菩薩衆			△ 驟き雨・恒沙	△ 雨・いさご	△ 船に…虚空を飛行し

表1のごとく、『往生要集』、『忍入り』、『孝感冥祥録』に「おなつ蘇甞物語」と共通する表現が非常に多く認められる。特に文言も意味も一致するものを以下に記す。

① 紫磨黄金の姿

往生したおなつが自身の体を版本で「紫磨黄金」、写本では「金の体」

と表現する。『無量寿経』、『観経』、『往生要集』に似た表現が見られるが、版本と一致する「紫磨黄金」を使用するのは『悉入り』である。『孝感冥祥録』本文では往生人は透き通った「水精」の肌の幼児として描かれるが、評注には「般舟讚に云」として往生者も浄土の衆生と同じく紫金色であるという解説がある。

② 阿弥陀仏

版本では阿弥陀仏を「黄金の山を鏝たるごとく」と比喻し、写本では「光りかゞやきすさまじき山のごとく」となる。阿弥陀仏を黄金の山に例えるのは「往生要集」の両者に「金山王のごとく」という表現が認められ、版本・写本と類似し、遙か遠くに望むのも同一である。また『孝感冥祥録』にも「金の山」の表現があり、同部の評注には「『往生要集』に云」と記されている。ちなみに『莊嚴経』¹⁵⁾に無量寿仏を「黄金山」に例える表現がある。

③ 宮殿・楼閣

宮殿に関してはすべてに類似の描写があるが、宮殿が「欄干」と「瓔珞」を備えるのは『悉入り』であり、『往生要集』では「欄干」ではなく「欄楯」、『孝感冥祥録』では「鉤欄」となる。

④ 百千種の楽

宝樹に風鈴瓔珞が下がり、「微妙百千種の音楽」等が聞こえるとあり、これは『阿弥陀経』と『往生要集』、『悉入り』、『孝感冥祥録』に同様の表現がある。

⑤ 四辺の道

池の周囲については版本・写本とも「四辺の道」が七宝又は黄金となっており、『阿弥陀経』と類似する。『往生要集』ではこの部分は『阿弥陀経』同様「四辺の階道」と表記されるが、『悉入り』では「四方のほとりのくわいらうきぎはしそりはしそのほか」となる。『孝感冥祥録』では「汀」としか表記されていない。

⑥ 百味の御食

「百味の御食」の語は『無量寿経』と『悉入り』に見られる。『往生要

集』では「欣求浄土」においてこの語は使用されていないが、『糸入り』では「百味」としている。『孝感冥祥録』では「百味」はみられない。

2.4. 写本のみに見られる描写

次に写本類のみで見られる描写を表3に提示する。

表3 写本のみに見られる描写と「浄土三部経」・「往生要集」等の対照

「おなつ蘇甞物語」 写本	浄土三部経			往生要集		孝感冥祥録
	無量寿経	観経	阿弥陀経	往生要集	糸入り	
結構な衣装を幾重も着ている	○ 第六天の自然の物			○ 自然の宝衣	○ 自然のたからの衣装	◎ 薄き衣のいと美しきを百重ばかり
二十歳ほどに若返っていた						△ 三歳ばかりの幼児
千里万里も一目に見え透く	○ 限極すべからず			○ 辺際あることなし	○ ほとりきはまりなし	○ 幾千里とも限り見えず
宮殿と宮殿の間には七宝のそり橋がかかる						○ 宝華つらなりて橋と成
樹の下に金銀七宝のまがきをゆう			○ 七重の欄楯			
樹の上に金の網をはる	○ 珍妙の宝網	○ 七重の網	○ 七重の羅網	○ 七重の宝網・羅網	○ たからの網・らまう	○ 其半より下に金の網
枝ごとに風鈴環珞が下がる	○ 宝の環珞	○ 天の環珞		○ 条のあひだには珠の環珞	○ えだのあひだに珠のやうらく	△ 網に七宝の風鈴幾千万
池の中には種々の鳥が遊ぶ		○ 百宝色の鳥		○ 百宝色の鳥	○ たからのいろの鳥	
雨や雪や霜はない						

大地はびいどろのごとくすき通る		○琉璃地の内外に映徹		○琉璃を以て	○瑠璃を以て	○琉璃にして金輪際まで透き通り
塵やほこりも無い ため手足も汚れず	○ 清浄安穩			○ 奇麗清浄	○ 奇麗浄土	
大地は柔らかい打綿のように踏めば窪み上げればふくれ	○ 陥み下ること四寸			◎ 兜羅綿のごとし…踏み下ること四寸	◎ とろめむのごとし…ふめば四寸づつくほみ	○ 柔らかにしてくほみ入る事四五寸
歩めば鈴の音がする						△ 三足あゆめば…無量の音楽鳴出
風も吹かないため、戸障子も要らない						
大地の下はすき通り、自分の姿が写り、下もまたおなじ極楽		△内外に映徹？				△ 我が身の影も地の底までうつり？
夏冬が無い ため暑さ寒さも無い	◎ 春秋冬夏なし寒からず熱からず			◎ 冷暖調和して春秋冬夏あることなし	◎ あつきとさむきとと、のひ…春秋冬夏ある事なし	
夜昼もないため灯火も要らない				◎ 日月灯燭を用ゐず	◎ 月火ともし灯をもちひず	△ 月日なしといへども依正の光明にて
食べ物 は望み次第のため、鍋釜も要らない	△ 自然に盈満す			△ 自然に現前し	△ 自然とまへに現じ	△ 自然と金の鉢幾箇もあらはれ
衣服は一度着れば汚れず破れたりもしない	◎ 裁縫・掃染・浣濯することあらば			◎ 裁縫・染治・浣濯を求めず	◎ たちぬひそめつくろひあらひす、ぐことをもとめず	

写本のみにはしか見られない描写は、主に身体を表す部分と極楽を娑婆と比較しその優位性を強調する部分である。やはりほとんどが『往生要集』、『ゑ入り』、『孝感冥祥録』に見られ、ここでも「浄土三部経」のいずれかにも有るものはほぼすべてが「往生要集」にも有るものである。また、「往生要集」に無い「そり橋」などいくつかの表現は『孝感冥祥録』に類似のものが見られる。

① 身 体

写本では版本より詳細に往生者の身体について描いている。写本には「結構な衣装を幾重も」があり、『無量寿経』と「往生要集」に菩薩の衣服に関する表現が見られるが、『孝感冥祥録』では「百重」も示される。しかしおなつが「二十歳ばかりの姿」に若返っているという表現はいずれにもない。

② 地の柔らかさ

写本類では表3に示したごとく、娑婆と比較した極楽の清浄さや快適さを列挙する部分が見られるが、版本には無い。大地の柔らかさは、『無量寿経』にある降り積もった妙華の「陥み下ること四寸、足を挙げおはるに随ひて、還復すること故のごとし」と類似の部分がある。この「四寸」は『孝感冥祥録』も同様である¹⁶⁾。地の柔らかさを「打綿」に例えるのは、『往生要集』の「兜羅綿のごとし」、『ゑ入り』の「とろめむのごとし」が合致し、『孝感冥祥録』では本文には同語はなく、評注に『宝積経無量寿会に云』として引用した部分に「兜羅綿」の語がある。

③ 快 適 さ

「夏冬が無く寒暖も無い」というのは、『無量寿経』、「往生要集」に同様の描写が見られる。また昼夜がなく灯火がいらぬのは『蘇生記』では記載されないが、後年の写本にはほぼ認められ、「往生要集」に同様の表記が見られる。衣服については『無量寿経』第三十八願があり、「往生要集」にも同様のものがある。これらの描写は『無量寿経』では異なった個所に現れるが、「往生要集」では同一個所にて列記され、写本と類似性が認められる。『孝感冥祥録』ではこれらはみられない。

3. 結果と考察

3.1. 比較検討の結果から

以上の結果を総合すると、この物語の極楽描写と同様の表現は、版本・写本共に、『往生要集』、『ゑ入り』、『孝感冥祥録』と共通するものが多数であった。「浄土三部経」の中では『無量寿経』との共通表現が最も多いが、そのほとんどが「往生要集」にもあるものである。さらに、阿弥陀仏を「金の山」に例えること、宮殿の「欄干」または「欄楯」、大地の柔らかさを「打綿」に例えることなどの、「浄土三部経」になく「往生要集」と『孝感冥祥録』にはある表現がみられる。宮殿に「欄干」と「瓔珞」を備え、「百味の御食」の語を使用するのは『ゑ入り』のみである。『孝感冥祥録』についても、評注までを対象とすると類似表現が非常に多く認められる。同書には『観経』や『往生要集』と共通する描写や、評注には各経典からの引用が多数あるための重複も考えられるが、『孝感冥祥録』にあって「往生要集」にない「迎え出る菩薩たち」、「池を蓮花に乗って巡る菩薩」、「雲に乗る天人」、「そり橋」に類する表現もみられる。しかし、身体表現や通力、八功德水、池の波、写本の灯火や衣服の表現など見つけられない描写も多く、『孝感冥祥録』のみが参照されたとは考えにくい。

以上の結果から、「おなつ蘇甦物語」の祖本の作者は「浄土三部経」ではなく、「往生要集」のうち『ゑ入り』をはじめとする「仮名書き絵入往生要集」と、『孝感冥祥録』双方から極楽描写を取り入れている可能性が高いと考えられる。ここで「おなつ蘇甦物語」の極楽描写の進行を「往生要集」と対比してみると、浄土への往生（第二蓮花初開楽）→通力自在（第三身相神通楽）→聖衆の出迎えと再会（第六引接結縁楽？第七聖衆俱会楽？）→大地・阿弥陀三尊・宮殿楼閣・宝樹・池（第四五妙境界楽）→説法聴聞・菩薩・天人・他生浄土の菩薩（第五快樂無退楽・第八見仏聞法楽・第九隨心供仏楽）と、十楽のうち八楽が対応し、第六、第七以外は進行順もほぼ一致することも、前述の結果を裏付けると言えよう。第一の聖

衆来迎楽は全く描かれぬが、これは来迎を不問とする真宗教義に準拠したためとも推察される。また、「往生要集」では極楽に先立ち冒頭の大文第一「厭離穢土」に地獄をはじめ六道が示されるが、おなつはこれらを見聞しない。しかし、写本類においては前半の勸化部分に現世での罪業の数々とそれに対応する三悪道が住持によって語られ、滅罪のための念仏が勧められる。ここからは、特に写本類については「往生要集」の流れに沿って進行していると考えられるのではないだろうか。

3.2. 「仮名書き絵入り往生要集」と「おなつ蘇甦物語」

「仮名書き絵入り往生要集」は『往生要集』を読みやすく仮名書きとし、挿絵を配した一般向けの一連の書籍である。『往生要集』に即してはいるが、書き下し文ではない。内容は「大文第一「厭離穢土」と大文第二「欣求浄土」のみであり、地獄をはじめ六道と極楽の有様が書かれた絵付きの読み物として、一般人が気軽に手に取ることのできるものであった。これらは初版の寛文十一年（1671）から大正期に渡るまで複数回再版・再刻されており、江戸後期には豪華に彩色された挿絵を備えるものも見られる。挿絵によって視覚的にも強い印象を与え、現代日本人の持つ地獄・極楽が対になったイメージはこれらによるものが大きいと考えられる¹⁷⁾。さらに、「仮名書き絵入り往生要集」は寺院での「六道絵」などの絵解きの台本とされたり¹⁸⁾、その挿絵自体がそのまま絵解きで使用される地獄極楽図の素材とされることもあった¹⁹⁾。すなわち、当時絵解き説法などを日常的に行っていた説教僧や末寺の僧侶、それらの絵解き説法を折に触れ楽しんでいた門徒たちにとっても、これは親しみ深いものであったと考えられる。『おなつ蘇甦物語』の祖本の作成にかかわった人物も、上記のような層に位置していたと考えて齟齬はないであろう。

3.3. 『孝感冥祥録』と「おなつ蘇甦物語」

今回対比した『孝感冥祥録』は浄土宗の勸化本であり、蘇生譚ではないが、主人公が地蔵菩薩に連れられ地獄と極楽を見聞するくだりがある。当

時非常に広く流布し、一万余部の摺出があったとの記録も見られる²⁰⁾。前述のごとくこの物語には「おなつ蘇甦物語」の極楽描写と共通するものが多くみられ、また、『往生要集』に見つけられなかった、「我が身の姿も地の底にうつり」、「宮殿に乗って虚空を飛行する天人」、「雲に乗る天人」、「宮殿間のそり橋」に類似した記述もある。ただ、天人と菩薩の違いや、池の描写、おなつの身体表現や後半の写本にある娑婆と比較した極楽の描写など、共通しないものも多い。一方、『孝感冥祥録』で強調される九品往生に沿った描写や、娑婆で念仏を怠っている者の蓮花の様子、極楽の門、池の船、新生の往生人が幼児の姿であること、女人が見当たらないこと、下方に懈慢国があることなどは、「おなつ蘇甦物語」では描かれない。

『孝感冥祥録』は各項に獅子谷法然院中興六世であり、『無能和尚行業記』の著者でもある宝州が評注を加えており²¹⁾、各描写の出典について多数の経典からの引用が示され、「おなつ蘇甦物語」で「浄土三部経」、「往生要集」に見つけられなかった描写の出典についても『宝積経』などが示されている。「おなつ蘇甦物語」の原作者も『無量寿経』の古・旧訳などではなく『孝感冥祥録』からこれらの表現を抽出したと考える方が自然であろう。

後年出版された、『孝感冥祥録』の評注部分を削除し挿絵を付けた『孝子善之丞感得伝』（天明二年・1782 これは版本『おなつ蘇甦物語』初版の九年後である）には、文章の表記に合致する挿絵が多数挿入されているが、この挿絵は『当麻曼荼羅』の各部分からの流用が指摘されている²²⁾。『孝子善之丞感得伝』と『孝感冥祥録』は本文の文章がほぼ同一であり、また『孝感冥祥録』の評注には、その極楽描写について『当麻曼荼羅』との一致を指摘している部分がある。筆者はこの研究を『印度學佛教學研究』に投稿した際には「おなつ蘇甦物語」の「往生要集」に見つからない極楽描写について、絵解き説法に使用された浄土変相図などから着想した可能性を指摘したが、上記の知見が新規に得られたことにより、これらが『孝感冥祥録』からのものであった可能性を考慮するべきと考えた。

先行研究で平田は「おなつ蘇甦物語」の「原」写本が浄土宗のフィール

ドから誕生した可能性²³⁾を指摘しているが、この物語の作者は、『孝感冥祥録』を参照していても、前記のごとく真宗教義に合致しない描写は取り入れていないことが推察される。しかし一点疑問が残るのは、「極楽でおなつを迎える菩薩たちが全て世々生々の知己である」という版本・写本に共通する表現である。『阿弥陀経』の「諸上善人俱会一処」、『往生要集』の「聖衆俱会楽」ともに、その意は「浄土で優れた菩薩聖衆と一処に会することができる」である。『孝感冥祥録』本文では極楽の門の上で「先立ちて往生を遂げたる聖衆」達が「閻浮同行の」往生者を迎える情景があるが、過去生の知己としては描かれていない。しかし同書の別の部分の評注に、『阿弥陀経』の「俱会一処」について法然の『小経私記』よりとして、「吉水大師諸上善人俱会一処の文を解して云、但比等の聖衆に俱に会するに非ず。復能く我等が無始以来の父母師長朋友知識妻子眷属のすでに往生せる者に会ふを得ん」²⁴⁾を引用しており、これは「おなつ蘇甦物語」の上記の場面と一致する。他の勸化本では浅井了意の『阿弥陀経鼓吹』（延宝五年・1677）に同様の解釈が記されている。了意は真宗の僧でもあったが、真宗教学で当時実際に「俱会一処」に対しこの解釈が認められていたか否かは確認できていない。しかし、もし先行研究が指摘するごとく、写本をもとに教団中央から再構成したものが版本であるとすると、版本にもこの部分が残されているということは、この法然の「俱会一処」解釈と同様の理解が近世中後期においては既に真宗内でもされていたということであろうか。この点については今後の課題としていきたい。

3.4. 版本と写本の差異

版本『おなつ蘇甦物語』の極楽描写は写本類に比較してやや簡潔である。例えばおなつが極楽で自身の体を見た時、版本は「忽ち紫磨黄金の姿」としか表記されないのに対し、写本類では「忽金の体と成、言葉にいわれぬ結構成衣装を幾重共なく着て、忽廿斗の姿と成、苦い事は失、楽みばかりいそいそとして」（『物語』）等と、衣装や年齢、その心情まで表現する。また、おなつの過去生の六道での姿の表現の詳細さや、「すさまじ

き山のごとく」、「消え入る程に有がたく」、「娑婆の乞食が天下様に成りたり共是程にはござるまい」(『物語』)等の、感嘆を強調する表現が目立ち、版本よりも世俗的な表現を多用している。また、写本類は極楽を娑婆と対比して優位点を強調し、極楽は娑婆のような愁いの無い世界であるから、早く往生すべきだと示す意図があると思われ、ここには「為楽願生」の気配がある。その視点で見ると、「雨や雪がない」、「風も吹かないため戸障子も要らない」などの表現は、現世との対比のために新しく挿入された可能性も考えられる。対して版本は極楽の描写よりも、住持の勸化やその後のおなつの語り等、直接の教化に関する部分に力点が置かれ、あくまで往生の因は信心であるというスタンスを保っている。この相違からは、版本は真宗教義に準拠することを意識する視点から、写本は当時の一般的な信仰心をもつ市井の人々の視点から書かれているように感じられる。この点では極楽描写部分の解析においても、先行研究の指摘と同様の結果となった。

3.5. 極楽見聞譚としての「おなつ蘇甦物語」

本邦には古来多くの蘇生譚や冥界遍歴譚が残されているが、極楽浄土の様子を詳細に描いたものはさほど多くない。平安時代の『日本霊異記』や『今昔物語』には蘇生譚が多数認められるが、地獄や獄卒が印象的に描かれるのに対し、極楽はその「門」や「宮殿」などの描写が断片的に挿入されるのみである。『往生要集』以降一般にも極楽のイメージが浸透したことが、臨終行儀や平等院をはじめとする阿弥陀堂などの建築からも考えられるが、説話においては室町時代の御伽草紙などでも、極楽を中心に描くものは見られない。近世に入って仏教書出版の興隆により、多くの一般向けの読み物が世に出るが、特に浄土宗の勸化本である『死霊解脱物語聞書』(元禄三年・1690)や『安西法師往生記』(正徳二年・1712初版?)、前述の『孝感冥祥録』(享保十九年・1734)には極楽が象徴的に描かれるようになる。しかしこれらの物語のうち『安西法師往生記』以外は地獄の描写に誌面を割き、その恐ろしさの人々に知らしめ、墮獄を回避し極楽に

往生するための念仏を勧奨する意図が感じられる。その他、中世以降一時作成されなくなっていた「往生伝」類が、主に浄土宗の中で復活すると、そこに夢中見聞譚や蘇生譚として、主に『観経』に基づいた極楽が描かれるようになる。浄土教蘇生譚の流れの中で、極楽が意識されるようになるのは近世以降のことと言えよう。この中で「おなつ蘇甦物語」の極楽は、前述のごとく来迎や九品往生、娑婆で念仏を怠る者の蓮花などが描かれず、真宗教義に即したと思われる特徴が見られる。

「おなつ蘇甦物語」のおなつの蘇生の特徴は、①何らかの功德によって浄土で救済を受けたために蘇生というものではなく、蘇生の目的は極楽浄土の存在を現世の人々に知らしめ、信心勧奨を行うためであり、再び娑婆で人生をおくるためではない。②おなつは極楽のみを体験し、地獄や六道については一切描かれない（写本類では前半の住持の勸化部分に悪業と関連した三悪道の名称が多数挿入されている）。③蘇生してもおなつが「此世を仕舞、追付参るべしとおもへば、此世にかなしきこともなく、又嬉しい事もなきなり」（『蘇生記』）と言うように、現世の価値観が希薄である、ということである。①の救済を受け現世に戻るといのは平安時代の蘇生譚に多く見られ、③は近世の極楽見聞譚の特徴と言え、往生伝や後世の妙好人伝にも同傾向が見られる。来世と現世の価値観が、中世後期から近世にかけて反転していく現象は、佐藤によっても指摘されている²⁵⁾。このような中近世の庶民文学作品に描かれてきた極楽浄土などに対し、来世と現世の位置づけの変遷とその意味から考察して行くことも今後必要であろう。

結 語

「おなつ蘇甦物語」版本と初期の写本類の極楽描写に対し、その祖本作成時に参照された可能性のある文献を検索した。極楽描写は先行研究で指摘された「浄土三部経」からではなく、当時広く一般に知られていた「仮名書き絵入り往生要集」と、浄土宗の勸化本『孝感冥祥録』からも抽出さ

れていたと考えられた。

この物語の成立事情については、さらに他部分の解析を行って総合的に論じることが必要だが、極楽描写に関してその参照文献が、「仮名書き絵入往生要集」と『孝感冥祥録』という通俗仏書であることから、在俗に近い位置からこの物語が生まれたと考えるべきであろう。その祖本の作者像は、教団中央に近く教学に携わる立場の人間ではなく、日常的に説法や絵解きなどを行い、門徒のニーズを意識していた末寺の僧侶や説教僧などの、唱導の立場にある者、あるいは門徒自身などであったと考える。

版本と写本類の比較では、写本類の方が極楽描写により力点を置き、現実世界と対比して、極楽の魅力を強調し往生を勧めるが、版本では極楽よりも勸化部分に力点があり、あくまでも信仰こそが往生の因であるとする。この点からは先行研究が示すごとく、祖本がまず門徒側の視点で作成され、その視点が反映されたまま書写され続けたものが写本であり、版本はそれを教団側から教学に準拠して再構成し出版したという仮説が、極楽描写についても支持される結果となった。しかしながら、この物語が浄土宗または自力性の強い真宗のフィールドから生まれたという仮説については、祖本の作者がその極楽描写を『往生要集』に典拠していながら、「聖衆来迎楽」が描かれないこと、『孝感冥祥録』を評注まで参照しているにもかかわらず、その描写から真宗教学に合致しない部分は取り込んでいないと考えられることから、やはり祖本も真宗のフィールド内で誕生したと考えるべきではないだろうか。ただ真宗内でどのような派から生まれたかは極楽部分のみからは確認できず、他部分の解析を行って結論付けたい。

「おなつ蘇甦物語」の祖本の作者が「仮名書き絵入往生要集」や『孝感冥祥録』などごく一般的な読み物からこの物語の極楽を構成したということからは、このようなイメージこそが、当時の市井の人々の共通認識としての「極楽浄土」であったと考えてよいであろう。この物語の実有的な極楽からは、その作成目的の一つに極楽や仏の存在を示すという意図があることを確実にくみ取ることができる。また、このような現世の価値観が希

薄な蘇生譚は、平安期以降の浄土系蘇生譚の変遷の中で近世の特徴と言える。それは裏を返せば、実際は近世では来世の存在感が希薄になっていたことを示すものであろう。当時を生きた人々にとっては、極楽にせよ地獄にせよ、来世の存在はさほどのリアリティを持たず、現実世界をいかに生きるかが大事であった。だからこそ、たとえ教学上は化土であっても、唱導上は「来世の存在証明」としてのこのような極楽を示す必要があったのではないだろうか。そしてその極楽を、写本類では現世と対比させて描いたということは、当時の人々にとって極楽をイメージすることがたやすくはなかったということを感じさせる。

当時の庶民の来世観や信仰のありかた、また、教学と唱導の差異などを知り得る資料は少ないが、このような在俗に親しまれた仏教説話を分析することで、それらに光を当てることができると考えている。

註

- 1) 「勸化本」は後小路により「江戸時代に直接・間接に在俗の人々への仏教の教化を目的として述作された、書写・刊行された書籍」と定義されている。後小路薫 2004「増訂 近世勸化本 刊行略年表」『国文学 解釈と教材の研究』49 (5), 110-129
- 2) 平田徳 2001「『おなつ蘇甦物語』研究—版本と「写本」のプロットの差異—」真宗研究 (45), 117-131
- 3) 前掲 [後小路薫, 増訂 近世勸化本 刊行略年表, 2004]
- 4) 安永二年版は池田屋七兵衛 (皇都) と柏原屋嘉助 (大坂) の奥書が有るもの、菊屋源兵衛と三文字屋和助 (いずれも皇都) の奥書のもの二種が認められるが、版木は同一と見られる。明治期には十九年と二十四年に西村七兵衛から、同じく明治二十四年に山内文華堂からも再版されている。
- 5) うち一点は『但馬国於夏蘇生記』であり、滋賀県長浜市の大依家の所蔵とのことである。平田徳氏の監修による『大系真宗史料』(伝記篇 9 近世門徒伝)に翻刻・解説されている。書写者は「保貞」となっており、平田氏は前掲論文でこの「保貞」を浄土宗僧と推定されている。もう一点は著者が最近入手した『但馬国於夏物語』で、「安永四年未中穉下旬」と記されている。書写者名はなく、「高須黒川家所持」とあるが、高須という地名は岐阜県の旧高須藩をはじめ日本各地に存在し、何れの地域かは特定できない。平田氏の論文発表時には後者は発見されて

(50)

いなかった。

- 6) 現時点で新日本古典籍総合データベースに25件の資料が挙げられている。うち12件が版本、13件が写本であり、内容が確認できる写本は限られるが、外題等から版本の書写でないと思われるものは9件である。加えて筆者が入手した写本が未翻刻のものを含め5点ある。
- 7) 吉海直人 2007 『『おなつ蘇甞物語』補遺』『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』(7), 109-120
- 8) ①『但馬国豊岡近所福田村おなつ物語』(享和二年 嘉十郎写・龍谷大学蔵)、②『但馬国福田村おなつ蘇生物語』(文政十二年 邦貞写・架蔵)、③『但馬国福田村物語』(安永八年から天保十二年まで六回書写・京都大学蔵)、④『福田村夏極楽参物語』(嘉永二年 水越斉女写・龍谷大学蔵)、⑤『但馬国おなつ物語』(安政二年 書写者不明・架蔵)⑥『但馬国福田村於夏物語』(年代および書写者不明・香川大学蔵)、⑦『おなつ往生物語』(年代および書写者不明・仏教大学蔵)、⑧『但州豊岡おなつ極楽参物語』(年代および書写者不明・横山邦治氏蔵・新日本古典籍DB公開)。
- 9) 足立実 1980 『妙好人おなつ』
- 10) 前掲 [平田徳, 2001]
- 11) 平田厚志・平田徳 2012 『大系真宗史料伝記篇9近世門徒伝』法蔵館 p 360
- 12) 吉海直人・上田かおり 2001 『『おなつ蘇甞物語』の翻刻と解題』『同志社女子大学日本語日本文学』(13), 49-70
- 13) 成田守 2001 『おなつ蘇甞物語』『東洋研究』(141), 84-98
- 14) 西田直樹 2001 『仮名書き絵入往生要集の成立と展開 研究篇・資料篇』和泉書院
- 15) 「頂禮之間忽然得見極楽世界無量壽佛容顏廣大色相端嚴如黄金山」大正蔵 vol.12, 325a
- 16) 後小路は「近世勸化本の極楽譚一善之丞地獄極楽巡りの背景一」でこの「四寸」について、主人公善之丞が帰依した浄土宗捨世派の僧無能の臨終を描いた『行業記』にも同様に「四寸」が記されることをあげ、「この『四寸』は偶然ではなく、両者に共通する場を考えるべきであろう」とする。さらに遠藤も後掲の [遠藤美織, 2021] で、信者の極楽感見譚にもこの「四寸」の表記があることから、「無能と信者の間で共通した認識があった」とする。「四寸」は『無量寿経』、『往生要集』に記されており、これらを共通の場とするべきではないだろうか。
- 17) 前掲 [西田直樹, 2001]
- 18) 赤井達郎 1989 『絵解きの系譜』教育社
- 19) 小栗栖健司 2011 『『往生要集絵』の諸本一誓教寺本「三界六道図絵」一』『塵芥：兵庫県立歴史博物館紀要』

- 20) 「孝感冥祥録と名て彼僧方へ遣しければ(中略)今に至ては一万余部摺出せるとかや」伝阿『女人愛執怪異録』序 後小路薫 1990「近世勸化本の極楽譚—善之丞の地獄極楽巡りの背景—」『国文学 解釈と鑑賞』55 (8), 129-134 にも記載がある。
- 21) 遠藤美織 2021「『孝子善之丞感得伝』研究：絵入り勸化本における地獄の表象と版本上の展開」『東京都江戸東京博物館紀要』(11), 204-169「web 版浄土宗新纂大辞典」(<http://jodoshuzensho.jp/daijiten/index.php/%E5%AE%9D%E6%B4%B2>)にも掲載されている(2021年10月26日最終閲覧)。
- 22) 前掲 [遠藤美織, 2021]
- 23) 前掲 [平田徳, 2001]
- 24) 『黒谷上人語燈録卷第三(阿弥陀経釈)』大正蔵 vol.83, p128b
- 25) 佐藤弘夫 2012「幽霊の誕生—江戸時代における死者供養の変容—」『宗教研究』85 (4), 159-160

【付記】 2021年11月1日脱稿 この研究は日本印度学仏教学会第72回学術大会にて発表し、『印度學佛教學研究』に投稿した論文に、新規に得られた見解を加えて改訂・増補した。

(武蔵野大学大学院博士後期課程)